

今立ち止まり、そしてこれから

2011年は、日本にとって激震の一年でした。とりわけ、東日本大震災。2011年3月11日、人間関係研究センター主催のTグループ（人間関係トレーニング）を清泉寮で開催するために、清里に向かっていました。清泉寮にたどり着くと、清泉寮のスタッフが総出で、自動ドアが開かないゆえ、手動で開扉し迎え入れられたのです。

翌日から開催予定のTグループのプレスタッフミーティングは、開催をするのかしないのか、開催するとしたらどのようなねらいでどのように実施できるのか、開催しないとしたらいつどのような判断をし、中止の情報提供をするのかなど、ろうそくの灯りのもと、寒い冬、部屋の暖炉に薪を焚きながら、長い討議を行いました。最終的には、中止とさせていただきました。

夕方から翌朝まで、Tグループの本来の意味、阪神・淡路大震災を体験しているスタッフからはその時の人々の体験と思いを聴き、またそれぞれのTグループに対する思いを語り合いました。その話し合いは、苦しくはあったものの充実した対話の時間をもつことができました。

早朝、参加予定者全員に、中止の連絡とお詫びをさせていただきました。その時には、大変な状況の中にもかかわらず、私どもへのねぎらいの言葉をかけていただき、皆様に感謝の気持ちを感じました。電話でつながり、応答の優しさで私たちの疲れを癒やしてくださったこと、皆様方から支えられている思いを強くしました。

被災地の方々におかれては、様々な苦難に見舞われ、その悩み苦しみの中からいかに行動をし、地域の人たちとどのように日々の生活を営むかといった問題に毎日向かい合いながら生きてこられていることと思います。私どもの一夜の苦悩だけでなく、生活の日々の苦悩を乗り越えていくためには、人々がつながり、支え合う関係が生まれること、そしてその広がりが大切になっているのでしょう。

東日本大震災から、ほぼ一年が経とうとしています。私たち自身、研究員の個別の活動はあったものの、東日本大震災への人間関係研究センターとしての取り組みは、明確になせずにいます。今一度、私どもがなすべきことを内省するためにも、「結い」というテーマを立て、私ども研究員だけでなく、センター外からも寄稿をお願いし、今立ち止まりそしてこれからの人と人とのかかわりを再び探求する特集にいたしました。

渥美公秀教授（大阪大学大学院）からは、「被災地のリレーから広域ユイへ」と題した論文を寄稿していただきました。渥美先生自身が、1995年の阪神・淡路大震災以来、2004年中越地震、2007年中越沖地震、そして2011年東日本大震災と活動されているNPOボランティア活動を事例に、広域ユイの可能性を示していただきました。また、富田庸子准教授（鎌倉女子大学）からも、「NPO環の会における『親子結び』」という題名の論文を寄稿していただけたことに、感謝いたします。

2011年度の活動をこの紀要と共にふりかえり、私どもがこれからのなすべきことを再度検討し、実行に移していく所存でございます。今後とも、私ども活動に対してご支援ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

南山大学人間関係研究センター長 津村俊充

